

クリスティナ・ロセッティの詩にみるバラの花の描写 (The Depiction of the Roses in the Poems of Christina Rossetti)

藤田晃代

序

ヴィクトリア朝の詩人クリスティナ・ロセッティ(Christina Rossetti, 1830-1894)は生涯にわたって抒情詩や宗教詩、物語詩を書き続けたが、特筆すべきは同時代の他の詩人に比べ、きわめて多くの花を主題にした詩を書き残した点である。なかでもモチーフとして彼女が多く取り上げたバラの花の描写は従来の宗教的な意味合いと同時に消費社会の到来によってもたらされた当時のバラブームを背景にして、人々にとってバラがより身近な花となっていた過程とあわせて理解することができる。クリスティナが詩のなかで描いたバラの花の変遷をみると神話的、宗教的な意味合いを帯びたものにはじまり、人々へ癒しを与えるもの、なぐさめをあらわすものへと主題が移行し、やがて人生のうつろい、喪失という詩人にとってより個人的に密接なつながりを意味するもの、そして人々の共感を呼び起こすきわめて多彩な意味合いを帯びるものへと展開していった点が特徴として浮かび上がってくる。本稿ではクリスティナ・ロセッティの詩にみられるバラの花の描写の変遷を追うことで詩人が描いたバラの花の意味づけを論じる。

I

i 文学とバラ

古来バラの花はヨーロッパをはじめとする多くの地域で文学作品のモチーフとして用いられてきた。ギリシア・ローマ神話においては愛と美の女神アフロディテ(Aphrodite)と結びつけられる花としてとらえられており、Peter Harknessによれば「ギリシア、ローマの伝説によると、バラはその美と芳香、形を与えたアフロディテの創造によるもの」⁽¹⁾といわれ、美の女神の花として珍重されるものであった。

中世ヨーロッパでは聖母マリア(Mary)の姿がバラとともに描かれるよ

うになり、「15世紀のヨーロッパの画家たちが好んで描いた絵画の主題はイエスと聖母マリアを神聖さのシンボルとしてのバラと結びつけて表現することにあつた」⁽²⁾とされ、バラはキリスト教との結びつきを持つ花としてとらえられるようになった。また聖母マリアは「棘のないバラであり、バラを戴いた天の女王」⁽³⁾ともいわれ、バラには宗教性とあわせて神秘性が込められるようになった。

またバラが象徴する意味もあり、「白バラは〈純潔〉や〈無垢〉と結びつけられるもの」⁽⁴⁾であり、「赤バラは対照的に〈苦痛〉、〈苦悩〉そして〈受難〉をあらわす」⁽⁵⁾とされている。さらに赤バラは「ギリシア神話のアフロディテが瀕死の恋人を追って白バラの棘を踏み、その血が赤バラになった伝説もふまえて〈真実の愛〉の象徴である」⁽⁶⁾ことも、バラの象徴性を考えるうえで重要である。一方、白バラの象徴するものに関して「ダンテによれば来世では白バラそのものが楽園のなかの天の都」⁽⁷⁾であり、ルネッサンス期以降のヨーロッパキリスト教世界での白バラは楽園を象徴するものとなった。

さらにバラはシェイクスピア(Shakespeare)の作品にも多く言及され、その劇作品でも取り上げられたランカスター家(the House of Lancaster)とヨーク家(the House of York)のばら戦争(the Wars of the Roses)を経てチューダーローズの起源となって以来、イギリス的なものの象徴にもなった。それぞれの紋章にランカスター家は赤バラ、ヨーク家は白バラを戴いたことから「ばら戦争」⁽⁸⁾と呼ばれる王位継承戦争を経て成立したチューダー朝(the House of Tudor)では赤と白の混じったバラが「王家統一の象徴であり、宮廷の平和をあらわすものとなったこと、やがてイングランド統合がチューダーローズによって象徴されるようになった」⁽⁹⁾ことも知られている。こうしてイギリスの王家をあらわすバラはルネッサンス期を経て国花としての役割も果たすようになった。

イタリア系イギリス人であり、幼いころからイタリア、イギリス両方の書物をはじめ多くの文学作品に親しんだクリスティナであったが、さまざまな文学作品に登場するバラのモチーフ、イメージを吸収し、その詩作に生かしていったことは想像に難くない。実際、多彩な作品が彼女に十分な影響を与えたといえるのではないか。クリスティナの父、ガブリエレ・ロセッティ(Gabriele Rossetti)はイタリア文学研究者であり、家庭では母フランシス(Frances)を通じて英語のみならずイタリア語でも教育を受けたクリスティナは幼いうちから兄ダンテ・ガブリエル(Dante Gabriel)やウイ

リアム・マイケル(William Michael)らとともに読書や詩作に励むこととなった。このような背景もあり、彼女の詩作の下地にはギリシア・ローマの神話、そして聖書からダンテの『神曲』、シェイクスピアまで多岐にわたる作品があったと考えることができる。⁽¹⁰⁾

ii 消費社会とバラ

近代以降のプラントハンティングを経てやがて多くの種類が存在するようになったバラの花だが、ヴィクトリア朝時代にはさらに品種改良によって寒冷な気候にも耐えうるものが登場するようになった。当時の事情についてLiza Picardによると「人々は切り花を花瓶に挿して観賞するようになったこと」⁽¹¹⁾、また「ガラス製造の技術発達により温室が登場、1845年のガラス税廃止」⁽¹²⁾以降は市民が「ガラス製の温室で手軽に植物を育て楽しむことも可能となった」⁽¹³⁾ともいわれる。1851年に開かれたロンドン万博では巨大な温室の水晶宮が主な会場となり、人々に多彩な花や植物を楽しむ機会が提供された。

以上のような背景もあり、ヴィクトリア朝期には人々のあいだにも花や植物を観賞する習慣が広まり、特に人気となった花がバラであった。また観賞にとどまらずバラ油の製造もおこなわれるようになり、後年に活躍したウィリアム・モリス(William Morris)のデザインでもバラモチーフが人気を博したように、人々が生活の中で商品化されたバラを楽しめるようになるなど、バラと人々を取り巻く環境が大きく変化したのもこの時代であった。鑑賞されるための花という観点でいえば、「王立園芸協会によるフラワーショーの開催」⁽¹⁴⁾が知られ、「1854年には王立バラ協会が水晶宮において品評会を開始した」⁽¹⁵⁾ことも消費される花としてのバラを象徴する出来事だったといえるだろう。

生涯のそのほとんどをロンドンで過ごしたクリスティナ・ロセッティだが、幼いころから多くの書物に触れ、成人した後は都市部と郊外を行き来し、同時代の作家や詩人たちとたとえあくまで一時的な社交とはいえ交流を繰り返すうちに書物に登場するものだけにとどまらず、実際にいろいろな花に接する機会を持つようになったであろうことは、彼女の作品に描かれる風景がDinah Roeの言うように「ロンドンの公園や緑地、郊外にある友人たちの邸宅などで過ごした記憶や想像から創出されたものである」⁽¹⁶⁾ことから容易に推測できる。さまざまな場面で目にした花を詩に描き込み、

やがてモチーフにして詩作をするようになったクリスティナ・ロセッティには以上のような事情があった点を踏まえて、論を進めていく。

II

i ブラッシュローズとダマスクローズ

バラブームに沸いたヴィクトリア朝時代だが、なかでも「一般に広く知れ渡っていたバラは大きく分けて二種類、ブラッシュローズとダマスクローズであった」⁽¹⁷⁾といわれる。ブラッシュローズは主に鑑賞用とされ、いわばイングリッシュガーデンの定番といえるバラとなったものであるが、「香りはないものの花卉が幾重にも重なったその優美な姿」⁽¹⁸⁾は各庭園を飾る花としてヴィクトリア朝期にはすでに広まっていた。「ブラッシュローズは広く栽培されており、1823年までにはすべてのイギリスのコテージの庭を飾るようになっていた」⁽¹⁹⁾とあることからわかるように、寒冷なイギリスの土地でも咲き誇るブラッシュローズは先に挙げたように品種改良によってもたらされたいわば「イギリスの庭園」を象徴する花となっていた。

一方、ダマスクローズについてはその強い香りゆえに実用面がより重視され、主にバラ油の製造に用いられた。バラ油の製造過程について記された内容によれば「10ccの量のバラ油を製造するために10,000個の花がまだ露の残っている明け方に摘み取られ、水に浸された後4時間ほど煮詰められてから蒸留された。より純度の高いバラ油を抽出するために蒸留作業は繰り返された」⁽²⁰⁾と述べられるように、その精製には時間と人手をかなり要し、人々の重労働が繰り返されていたこともうかがえる。

バラを主題にした多くの詩を残したクリスティナであるが、詩のなかでは特定の品種について述べた言葉はわずかしか残しておらず、むしろバラの姿や香りに描写を集中させている。本稿ではクリスティナが描いたバラの背景にはこれらヴィクトリア朝を代表するバラともいえるブラッシュローズおよびダマスクローズがあるものとして論じていく。

ii 「花の中の花」

クリスティナの詩にみるバラの描写について、まずは比較的初期のものから論じていく。初期作品の“The Rose” (1847)について考えるが、この詩はソネット形式をとっており、主題はバラの美しさを讃えたものである。

語り手はバラへ直接呼びかける。

O Rose, thou flower of flowers, thou fragrant wonder,
 Who shall describe thee in thy ruddy prime;
 Thy perfect fullness in the summer time;
 When the pale leaves blushing part asunder
 And show the warm red heart lies growing under? (1-5) ⁽²¹⁾

詩に登場するバラは“ruddy prime”「赤らんだ最良のもの」といわれる花卉、そして“warm red heart”「あたたかな赤い心臓」と表現される芯を持つことから赤バラであることが示される。ここではバラは大文字から表記がはじまっており、特別な意味をもつ存在であるかのような印象を与える。さらにバラは冒頭で聖書の句になぞらえられ“flower of flowers”「花の中の花」⁽²²⁾と呼ばれることでいちばんの優位にあることが強調される。バラが存在する意味について、詩人は天からもたらされたものであることを意識して詩を展開していく。“And He Who is All-Wise, He hath decreed thee / To gladden earth and cheer all hearts below.” (13-14)と続き、苦しむ人々を慰めるためにバラが地上に降りて来たことが述べられる。赤バラが象徴する〈苦痛〉〈苦悩〉〈受難〉の意味を考えると、地上に咲いたバラは人々の苦悩を受け止めるために降りてきた存在であることがうかがえ、“The Rose”は中世キリスト教以来の宗教的な次元を体現したものと見える。

さらに別の詩“Queen Rose” (1849)では主題となるバラが他の花と比較されることで他よりも抜きんできた存在としてうたわれる。詩のタイトルでもある“Queen Rose”という言葉は先に挙げたように聖母マリアを想起させるものであるが、この詩で中心となる主題はむしろ詩人がバラの花を選び取る行為である。

The jessamine shows like a star;
 The lilies sway like scepters slim;
 Fair clematis from near and far
 Sets forth its wayward tangled whim;
 Curved meadowsweet bloom rich and dim;—
 But yet a rose is fairer far. (1-6)

詩人は連の最後でバラに言及することでバラの花が他のどの花よりも勝っていることを強調する。ジャスミンやユリの気高い美しさ、クレマ

チスそしてメドースイートの美しい姿をさまざまな比喩や形容詞を用いて述べる一方、バラの姿についてはただ“*But yet a rose is fairer far*” (6) と言うにとどめる。具体的にバラの姿を語らなくても他の花に比較して“*fairer far*”と表現するだけでその美しさは広く共通認識として存在することを詩人が受け止め、あたかも示しているかのようである。つづいてその芳香にも言及するが、ここでも同様に対比される他の花の香りを強調することで逆に際立たせている。“*The jessamine is odorous; so / Maid lilies are, and clematis; / And where tall meadowsweet flowers grow / A rare and subtle perfume is; —*” (7-10) と他の花では“*odorous*”や“*perfume*”などの香りをあらわす語を用いて表現する一方で“*What can be more choice than these? — / A rose when it doth bud and blow.*”(11-12)と、バラの花ではその開花だけをうたうことで芳しい香りを想起させる。

“*Queen Rose*”に登場するバラの種類についてクリスティナは何も言及していないが、白い花で知られるジャスミンや〈純潔〉をあらわすユリとの対比から考えてここでは白バラをうたった可能性が考えられ、強い香りの描写からはバラ油製造に欠かせないダマスクローズをイメージしてうたい込んでいると思われる。白いバラの持つイメージについては、先に挙げたダンテのバラが思い起こされるが、コーイストラ(Kooistra)の言及にあるよう、「クリスティナが花の象徴性を用いる傾向は家族の伝統に端を発しており、ロセッティ家の人々は皆、楽園の幸福の象徴としてのダンテの幾重にも花卉の重なったバラを知っていた」⁽²³⁾ことに由来すると考えられ、故郷イタリアが生んだ偉大な文学者ダンテの伝統をも基層にしたクリスティナ・ロセッティの多才な傾向が見えてくる。

初期に書かれたクリスティナによる一連のバラの詩では宗教的な意味合いやダンテの影響をなぞらえながらも詩人がその美しさをたたえ、うたうことで語り手すなわち詩人とのバラの関係がむしろ強調された作品という側面も考えられる。ここにはやがて詩人にとって個人的により密接な関係のバラの描写へと転換していく過程が見られるのである。

III

i バラは喜び

ロンドン万博が開催された年に書かれた“*A Summer Wish*”(1851)の詩について次にみていく。この詩では詩人とバラの関係がより近しいものと

なって表現されるようになり、書き出しでは露を帯びたバラがうたわれる。夕べに露を落として朝に再びそれを集める場面はバラ油製造の花の摘み取りを想起させる。

Live all thy sweet life thro'
Sweet Rose, dew- sprent,
Drop down thine evening dew
To gather it anew
When day is bright: (1-5)

花の摘み取りを思わせるものの、このバラは摘まれることなくただ咲くバラとして描かれていく。バラが咲いた理由は他者のために咲くことであり、人々のもとへ遣わされたバラに“I fancy thou wast meant / Chiefly to give delight.” (6-7)と詩人が続けて呼びかけるが、“The Rose”でもうたわれた天上から遣わされたバラという宗教的な意味合いがここにも込められていることがうかがえるだろう。またこの詩では語り手がバラに自身の姿を重ねて語る点が注目される。詩の後半で、“Oh that it were with me / As with the flower; / Blooming on its own tree / For butterfly and bee / Its summer morns[.]” (15-19)と述べ、自身もバラのように他者のために生き、他者に喜びを与える存在でありたいと願いをこめる。たとえこの思いが理想であるとしても、花咲くバラへ寄せた詩人の思いがより密接になっていることの証であろう。地上にもたらされたバラであるゆえにうつろう花ではあるが、うつろうからこそその時を懸命に生きるという姿勢が詩に込められているといえる。

さらにクリスティナは“Once For All” (1866)の詩ではバラの開花に愛の芽生えをなぞらえて描き、花と語り手の心情をより密接なものとして表現している。この詩については「雑誌*Edinburgh Evening Courant*の寄稿者でもあり編集者でもあったジェイムズ・ハネイ(James Hanney)の前妻で早逝したマーガレット・トンプソン(Margaret Thompson)の思い出をヒントに書いた」⁽²⁴⁾とされるが、一方でウィリアム・ロセッティは「このソネットはハネイ氏が再婚の約束を交わした際に書かれた」⁽²⁵⁾とも記しており、マーガレットの早逝と氏の再婚をめぐる状況が若干複雑に絡んでいる点も指摘できる。語り手はハネイ氏をモデルとした人物であることが予測でき、ソネット形式をとった愛の詩として読めるのだが、詩は冒頭からバラの香りそしてその開花を愛でる場面ではじまる。

I said: This is a beauteous fresh rose
 I said: I will delight me with its scent;
 Will watch its lovely curve of languishment
 Will watch its leaves unclose, its heart unclose (1-4)

香りに続いて花の姿かたちに言及することで語り手は思い煩う姿をバラの花に寄せているかのようなのである。バラの美しさと香り、そして愛を重ねてうたう手法はアフロディテの神話を想起させるが、“A flower is come for every flower that went / In autumn, the sun glows, the south wind blows.”(7-8)と続き、暖かな日差しと南風とともに到来した花の季節は新たな愛の芽生えをも意味することを示唆しているだろう。語り手はまだ雪の残る春の初めに庭で見つけたバラの花にあらたな思いを寄せていく。詩は“*And there lay snow unmelted by the sun : — / I answered : Take who will the path I took, / Winter nips once for all ; love is but one.*” (12-14)と結ばれる。冬がすべてを奪う死の季節であればマーガレットの死がまさにそれをあらわしていた。春の到来はあらたな生命の季節、バラの開花は新しい愛をあらわすが、愛と死、生と死を幾重にも重ねたこの詩からは愛する者の死を経て今を新たに生きる決意をバラの花に込めた新たなモチーフの展開がうかがえる。

ii 散りゆくバラ

語り手の心情がバラに仮託されるようになり、愛と死をめぐる主題に絡めて描かれるようになった点をこれまで論じたが、やがてクリスティナの詩作では中期から晩年にかけて詩人の人生そのものが反映されるようになっていく。“An October Garden” (1877)では散りゆく秋のバラをめぐって嘆く語り手の言葉が語られる。

In my autumn garden I was fain
 To mourn among my scattered roses;
 Alas for that last rosebud which uncloses
 To Autumn's languid sun and rain
 When all the world is on the wane! (1-5)

秋の庭をさまよう語り手は散ったバラの花弁のなかに残ったバラをさがしている。最後に残ったバラはつばみであるが、秋の物憂げな日の光と雨の中でかろうじて存在するものである。秋の日のバラは最後まで語り手の

もとに残ったたった一つのバラである。最後のバラを前に、うつろう花を追いかけていた思いが詩の後半で綴られる。“More choice, more dear that rosebud which uncloses / Faint-scented, pinched, upon its stalk, / That least and last which cold wind balk [.]” (10-12)と語られ、その香りはすでに失われつつも秋の冷たい日の下にバラがあればたとえ時はうつろっても花が未だ存在していることにごそ意義を見出したいと願う思いが見てとれる。ここでは語り手の心情がより直接的にうつろうバラに反映されることで、バラの存在意義が強調される。

A rose it is tho' least and last of all,

A rose to me tho' at the fall. (イタリック体は筆者による) (13-14)

語り手が求め、探し続ける限りバラはバラとして存在する。不定冠詞付きで“a rose”と表現されるバラは特定されない「ある花」である半面、語り手がずっと希求し続ける「ある花」でもあるのだ。希求し続ける限り“a rose”でありつづけるバラ。人生が中盤に差し掛かったころに重ねてうたわれる秋のバラはやがて多くの別れやうつろいによって彩られることが多くなる詩人の人生を表現したものといえよう。

さらに喪失を主題とした別の詩では枯れ果てたバラが主題として選ばれる。“Summer Is Ended” (1881) はまさしく破恋を主題とした詩であり、恋の終わりが枯れ果てたバラによって表現される。

To think that this meaningless thing was ever a rose,

Scentless, colourless, this!

Will it ever be thus (who knows?)

Thus with our bliss,

If we wait till the close? (イタリック体は筆者による) (1-5)

語り手の目の前にあらわれたものは今や“this meaningless thing”と表現されるしかない枯れ果てた姿をさらすバラである。もはや色や香りというバラをバラたらしめる要素をすべて失っている。“this”と指示形容詞および指示代名詞で二度よばれるこの花には季節の終わりと同時に恋の終わりが重ねて表現されている。枯れて寿命が尽きる花のように恋にも終わりが来たことが告げられる。

Tho' we care not to wait for the end, there comes the end

Sooner, later, at last,

Which nothing can mar, nothing mend:

An end locked *fast*,

Bent we cannot *re-bend*. (イタリック体は筆者による) (6-10)

この詩はクリ스티ナの他の詩に比べ全体のリズムにぎこちなさを伴っている。第一連の書き出しで“To think that this meaningless thing was ever a rose[.]” (イタリック体の箇所は筆者による強調) (1)と破擦音ではじまる語が繰り返され、音数も一行目は弱強六歩格でありながら続く行では三歩格、四歩格の繰り返しなどリズムが安定せず不安定な要素をはらんでいく。このリズムのぎこちなさは恋の終わりを受け止めきれない戸惑いや驚きを示すものと解釈できるが、第一連の脚韻はababaと韻を踏みつつ‘a’と‘b’でそれぞれ“rose”と“this”、“knows”と“bliss”というようにaとbそれぞれで半韻が用いられ、第二連では脚韻でend, mend, re-bendそしてlast, fastが完全に韻を踏む。半韻はなかなか断ち切れない思いを、完全韻はこれまでのことをあきらめる決意を表明しているように響く。これらの点を踏まえるとリズムのぎこちなさが恋の終わりの苦悩を示している一方であきらめながらも新たな模索をさがしている状況うかがえる。“Summer Is Ended”では破恋をうたいながらもいまだ完全に断ち切ることができない揺れる心情こそがむしろ主題と言える。枯れ果てたバラは苦悩しつつまだ思いを断ち切れない語り手の姿を象徴するものと言えるだろう。

IV

i そこにはないバラ

ここまでクリスティナ・ロッセティの詩にみるバラの描写をみてきたが、それらはいずれもバラが咲き、しばみそして散るという季節や自然のうつろいに語り手が心情を重ねて語っていくものであった。晩年に描かれた“Where shall I find a white rose blowing?” (1884)ではすでに存在しないバラを求めて独白する語り手が登場する。この詩では三種類のバラがうたわれるのだが、白バラ、赤バラ、そしてブラッシュローズが順次うたわれていく。それぞれについてみていく。

Where shall I find a white rose blowing? —

Out in the garden where all sweets be. —

But out in my garden the snow was snowing

And never a white rose opened for me. (1-4)

語り手は白バラを求めて庭をさがした。先に述べたように〈純潔〉や〈無

垢〉を象徴する白バラである。しかし冬の季節の庭で代わりに「咲いていた」のは雪であった。次にブラッシュローズを求め、“Where shall I find a blush rose blushing?”(7)と語りかける。しかし、当然その姿はなく、“But out in my garden the rain was rushing / And never a blush rose raised its head.”(9-10)と繰り返され、同時代のイギリスの庭を飾ったこの花も今や失われたことが示される。次の連では赤いバラに言及するが、バラが咲くはずの庭は洪水で溢れ、花も流されていた。

But out in my garden a flood was flooding
And never a red rose began to blow.
Out in a flooding what should be budding?
All flooding! (15-18)

愛の象徴である赤バラも失われ、クリスティナ晩年のこの詩ではバラはそこには存在しないものとして描かれている。ないことを強調した描写に徹し、そこにはないバラを求め、繰り返し言及し続ける表現は「ない」ことを認識することで詩人がそれらの姿を見ているといういわば逆説的な構造を生じさせている。ここで語られることがらの重要な点は、バラがないことではなく、咲いていないことでそれらが咲いている状態を語り手が思い起こしている点にあるのだ。

さらにそれぞれのバラが「咲いた」場合の状態をあらわす表現をみてみる。バラが咲くことについて“blowing”という語が用いられているが、“blow”という語には「花が咲く／風が吹く」両方の意味があり、風という生命の息吹がもたらされ花が咲く一方、吹く風によってまた花は散ることから、バラをめぐる生と死の両義性が込められている。ブラッシュローズではその名と同じ“blush”から派生した“blushing”が用いられているが、これは「ばら色になる」および「赤らむ」という意味からつぼみが膨らんで開花が予想されること、さらには生命の芽生えを想起させるものになっている。最終連で語り手はバラが「そこにはない」今の庭を語る。バラは水に流され、あとに残ったのは荒涼としたいばらだけの庭である。

Now is winter and now is sorrow,
No roses but only thorns today:
Thorns will put on roses tomorrow,
Winter and sorrow scudding away.
No more winter and no more sorrow

Tomorrow. (19-24)

バラの花がない季節、庭は雪に覆われ、やがて雨や洪水が溢れる場所と化す。風と同様に雨もまた花をしぼませ散らすものである一方、水は生命に潤いや活力を与えるものでもあることから、ここでもその両義性が注目される。いばらすなわち棘はアフロディテが踏んだ棘にもつながる一方、“Thorns will put on roses tomorrow[.]” (21) という詩の一節からは、生命の芽生えが読み取れ、明日にはまた咲くことはバラの多年生を思わせる。最終連で明日には再び咲くバラが言及されることは、この詩の主題に生と死の両義性だけでなく再生や希望が込められているといえるだろう。従来の文学モチーフに加えて同時代のバラのイメージを詩にうたいこんだクリスティナの詩作は最終的に「そこにはない三種のバラ」をうたい込むに至ってバラの描写にうつろいやすい人生を重ねつつ希望を失わないことを描く点に集約されていった。

結

クリスティナ・ロセッティは生涯においてバラを主題にした詩を多く残したが、それらはすべて神話的、宗教的な背景からはじまり、やがては詩人とバラをめぐる主題が人生のさまざまな側面と重ねて描かれるようになっていった。自ら虚弱体質であり、生涯において身近な人の死を次々体験したクリスティナであったが、なかでも兄ダンテ・ガブリエルの非業の死は彼女の人生に計り知れない影を投げかけた。さらに繁栄をきわめたヴィクトリア朝時代だが、1853年に勃発したクリミア戦争(the Crimean War)は人々に生と死、繁栄と荒廃が極めて近いところにあることをあらためて知らせる結果をもたらした。クリスティナ・ロセッティにとって愛と死そして生と死はつねにすぐ近くにあり、それらがなかば一体となった世界を表現していくことこそ詩作を通じて彼女が行った探求であったといえる。

註

(本稿における文献引用箇所の日本語はすべて筆者による拙訳である。)

- (1) Peter Harkness, *The Rose: A Colourful Inheritance*, 2003. (London: The Royal Horticultural Society, 2005) 12.

- (2) Ibid., 20.
- (3) Ibid., 21.
- (4) Ibid., 21.
- (5) Ibid., 21.
- (6) Ibid., 21.
- (7) Ibid., 21.
- (8) ばら戦争(the Wars of the Roses)についてはシェイクスピアをはじめ後年多くの文学作品や絵画作品で題材として取り上げられている。Harknessは上述の著書の中でHenry A. Payne (1868-1940)による絵画“the Wars of the Roses” (1910)を紹介している。
- (9) Peter Harkness, *The Rose : A Colourful Inheritance*, 27.
- (10) ブロンテ家(the Brontës)のきょうだいたちがそうであったように、ロセッティ家の子どもたちも幼いころから読書に励み、詩作を行なった。ロセッティ家のきょうだいの場合、ソネット (14行詩) づくりにいそしんだことが特徴的である。
- (11) Liza Picard, *Victorian London: The Tale of A City 1840-1870*, 2005. (New York: Saint Martin's Griffin, 2007) 145.
- (12) Ibid., 216.
- (13) Ibid., 145.
- (14) Ibid., 145.
- (15) Ibid., 145.
- (16) Dinah Roe, “Introduction” , *The Pre-Raphaelites from Rossetti to Ruskin*, (London: Penguin, 2010) xxi-xxii.
- (17) Peter Harkness, *The Rose : A Colourful Inheritance*, 142.
- (18) Ibid., 142.
- (19) Ibid., 142.
- (20) Ibid., 120.
- (21) R. W. Crump and Betty S. Flowers, eds. *Christina Rossetti: The Complete Poems*, (London: Penguin, 2001) 557. 以下、本稿における詩の引用は同書による。詩のタイトルの後には発表年を記載し、引用後の括弧内に行を示す。
- (22) クリスティナ・ロセッティは英国国教徒であり、聖書から題材をとった多くの詩を残している。

- (23) Lorraine Janzen Kooistra, *Christina Rossetti and Illustration: A Publishing History*, (Ohio : Ohio University Press, 2002) 39.
- (24) Betty S. Flowers, “Notes”, *Christina Rossetti: The Complete Poems*, R. W. Crump and Betty S. Flowers, eds. 932.
- (25) *Ibid.*, 932.

参考文献

- Battiscombe, Georgina. *Christina Rossetti : A Divided Life*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1981.
- Harkness, Peter. *The Rose : A Colourful Inheritance*. 2003, London: The Royal Horticultural Society, 2005.
- 金城盛紀。『花のイギリス文学』東京、研究社出版、1997年。
- Kooistra, Lorraine Janzen. *Christina Rossetti and Illustration : A Publishing History*. Ohio : Ohio University Press, 2002.
- Marsh, Jan. *Pre-Raphaelite Sisterhood*. London: Quartet Book Ltd., 1985.
- Picard, Liza. *Victorian London: The Tale of A City 1840-1870*, 2005, New York: Saint Martin’s Griffin, 2007.
- Roe, Dinah. “Introduction.” *The Pre-Raphaelites from Rossetti to Ruskin*. London: Penguin, 2010. xvii-xxxvi.
- _____. *The Pre-Raphaelites from Rossetti to Ruskin*. London: Penguin, 2010.
- Rossetti, Christina. *Christina Rossetti : The Complete Poems*. Eds. R. W. Crump and Betty S. Flowers. London: Penguin, 2001.
- 山中哲夫。『花の詩史：詩にうたわれた花の意味』東京、大修館書店、1992年、第二刷、2001年。